

令和元(平成31)年東京都輸血状況調査集計結果(概要)

1 調査対象・回答率

(1) 目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対象

都内にある病床数 20 床以上の医療機関：618 箇所、調査期間：平成 31 年 1 月～令和元年 12 月を対象とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、ファクシミリ、電子メールのいずれかとした。

(3) 結果

477 機関 (回答率 77.2%) (前年：628 機関中 529 機関 同 84.2%) から回答が得られ、うち一般病床 100 床以上の機関は 175 機関 (同 85.0%) であった。

得られた回答は「令和元(平成31)年輸血状況調査集計結果(概要)」としてまとめるとともに、100 床以上の 175 機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報告

「令和元(平成31)年輸血状況調査集計結果(概要)」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100 床以上の 175 機関については、「令和元(平成31)年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」(個票)を作成し送付する。

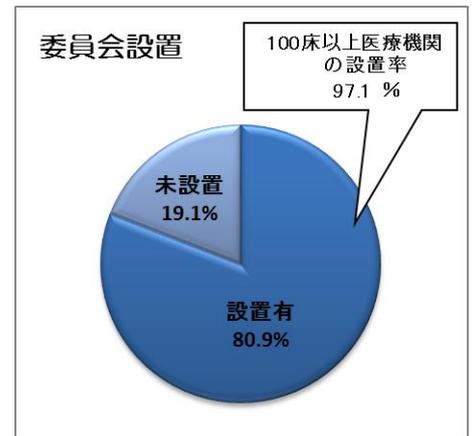
2 集計結果の概要(項目別)

(1) 輸血療法委員会の設置状況

委員会を設置している医療機関は、386 機関 (80.9%) であった。

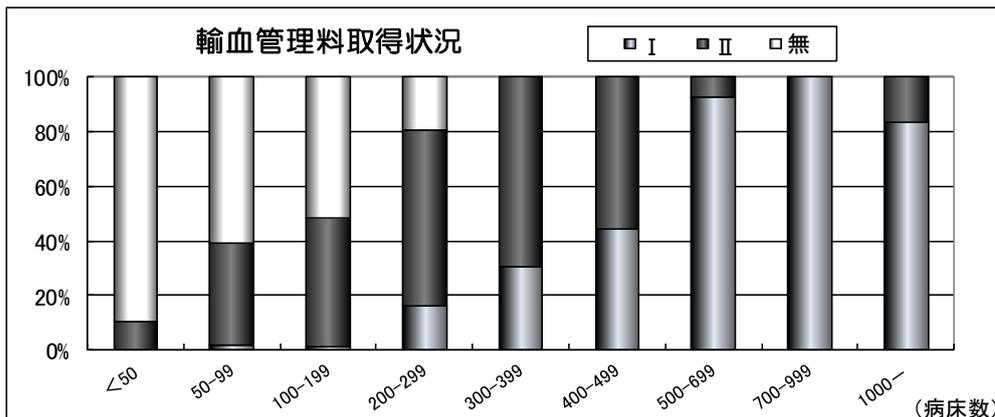
(前年 419 機関 79.2%)

一般病床 100 床以上の 175 機関でみると、委員会設置は 170 機関 (97.1%) であった。(前年 186 機関 96.4%)

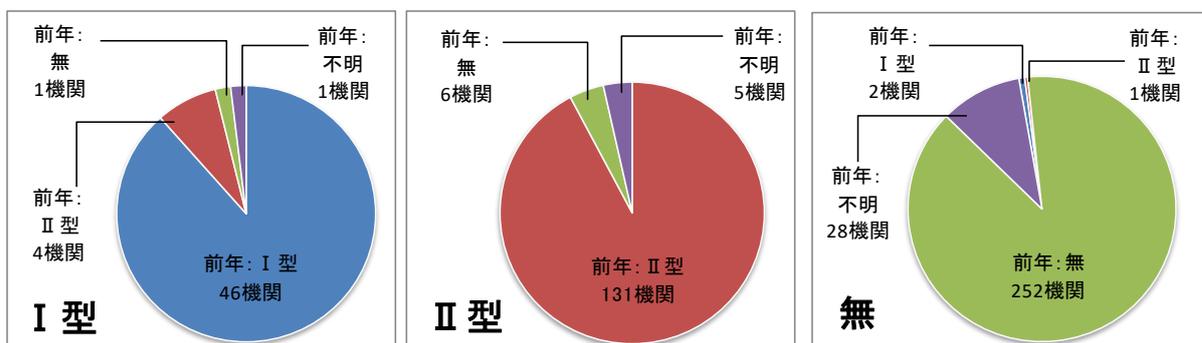


(2) 輸血管理料 (I 型・II 型) の取得状況

取得機関は 194 機関 (40.7%) で、内訳は I 型 52 機関、II 型 142 機関であった。(前年：207 機関 39.1% I 型 54 機関、II 型 153 機関)

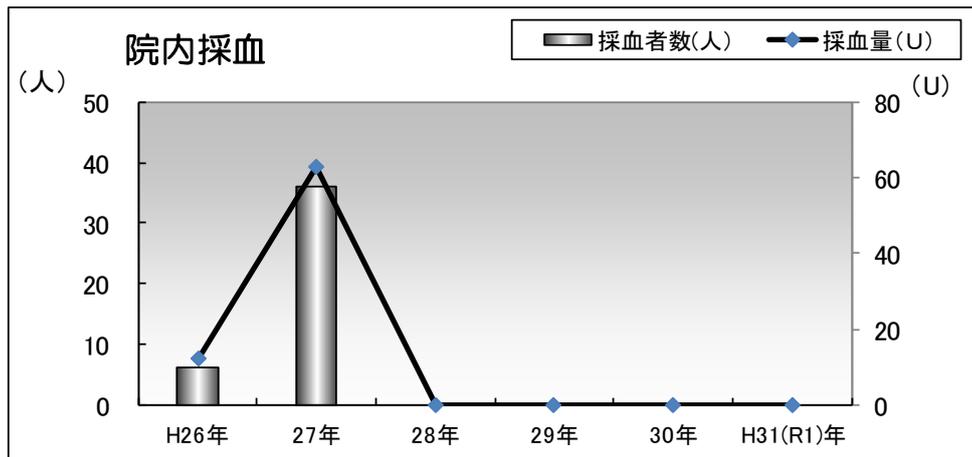


輸血管理料の取得状況の変化(前年対比)



(3) 院内採血の状況

採血者数は0人（前年：0人）、採血量は0U（前年：0U）であり、前年と同様である。

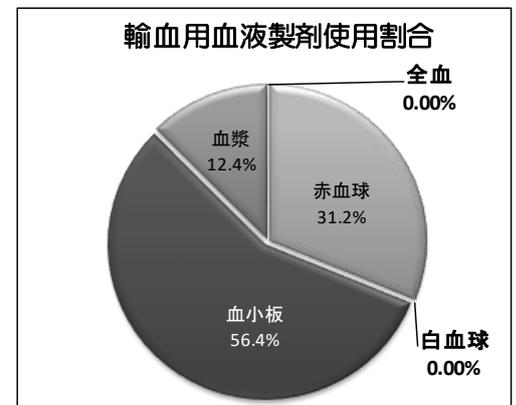


(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は31.2%(609,128U)で、前年30.8%(637,696U)とほぼ横ばいである。

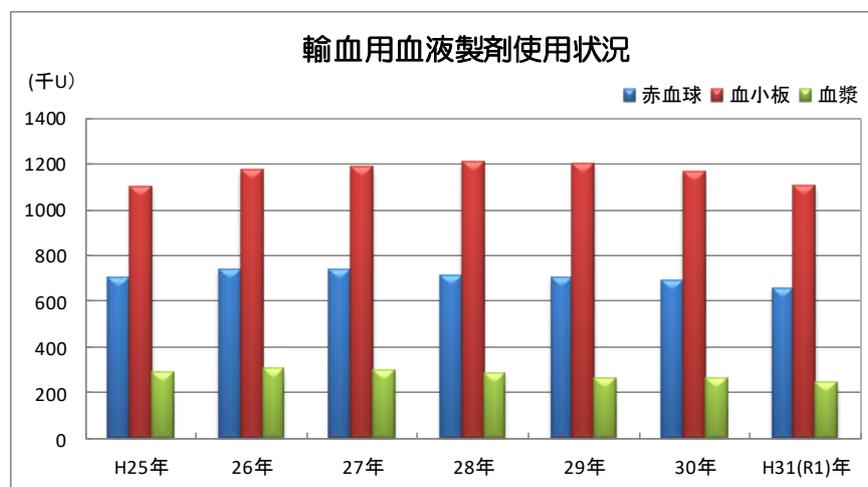
イ 血小板製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は56.4%(1,102,868U)で、前年56.4%(1,168,166U)とほぼ横ばいである。

ウ 血漿製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は12.4%(243,115U)で、前年12.8%(265,992U)とほぼ横ばいである。



エ 全血製剤（日赤製）の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は0.00%(28U)で、前年0.00%(32U)とほぼ横ばいである。

オ 白血球濃厚液の使用は2機関あり、使用対象はドナーリンパ球輸注（10人）であった。



(5) GVHD予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院 376 機関中の全てが照射血を使用しており、前年の 100%と同様である。

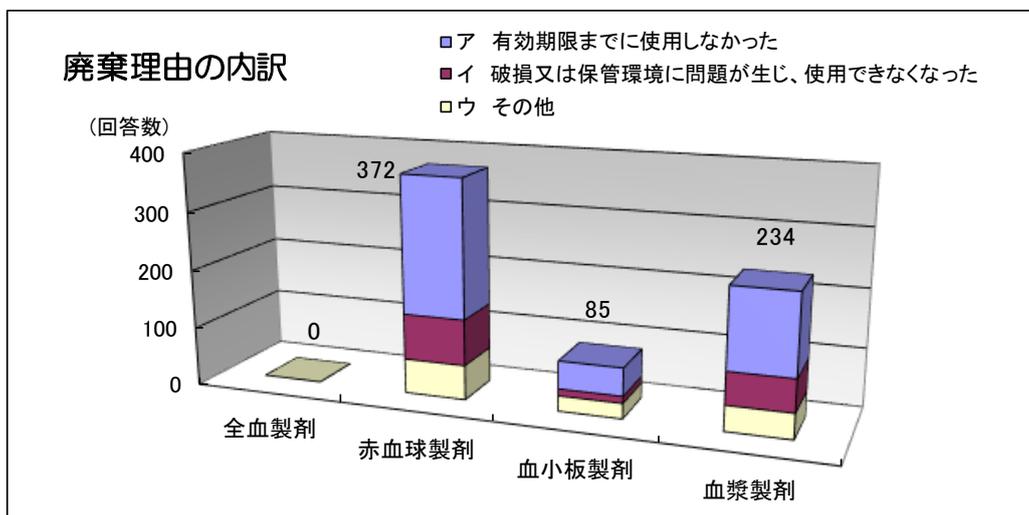
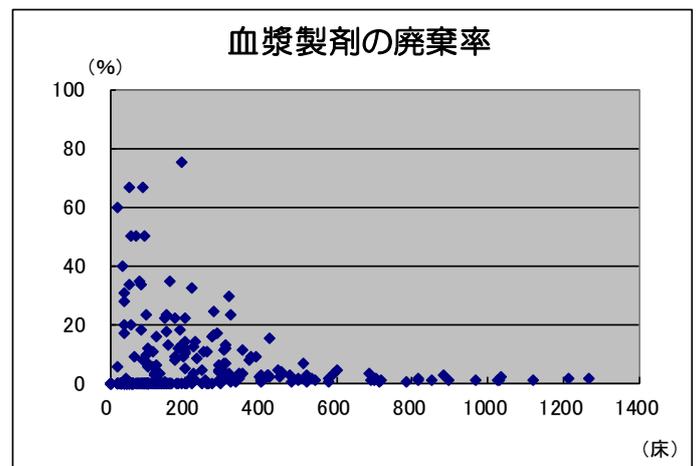
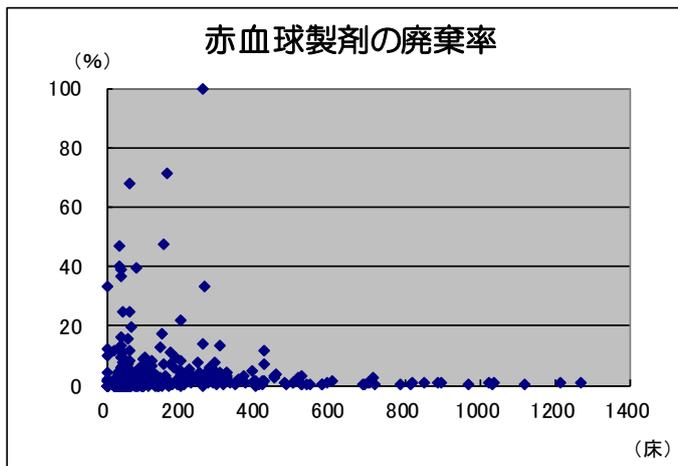
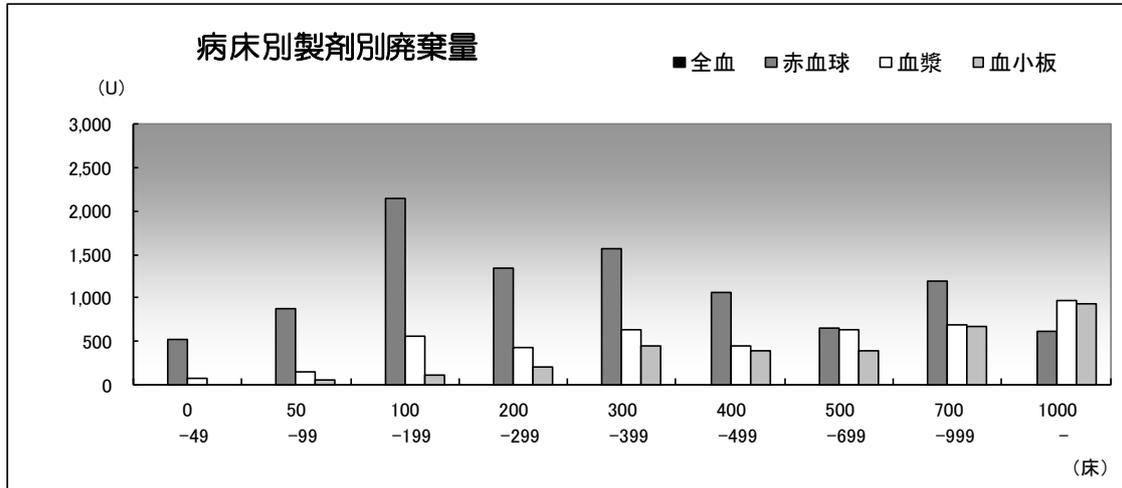
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

ア 全血製剤の廃棄はなかった。

イ 赤血球製剤の廃棄率は 1.6%(9,994U)で、前年 1.9%(11,962U)より減少した。

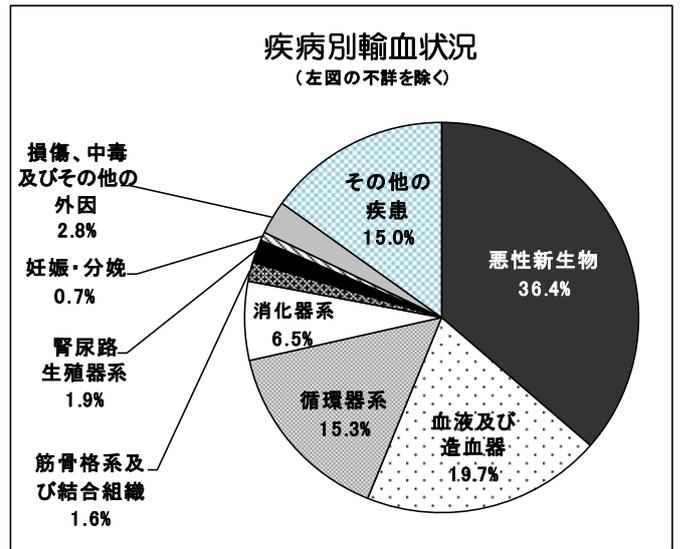
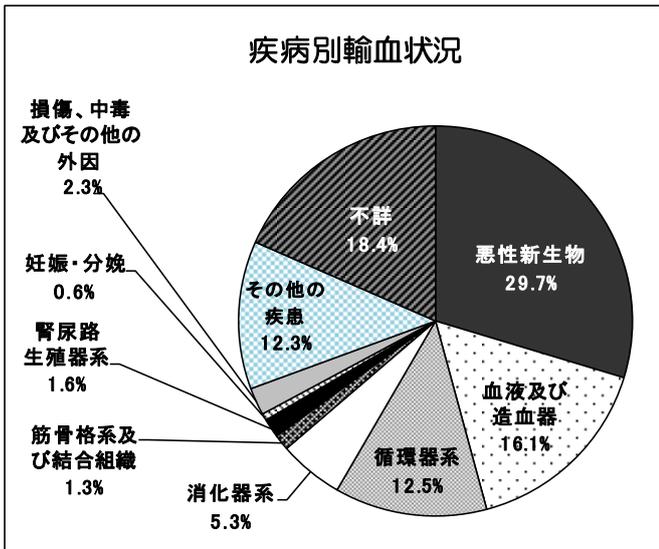
ウ 血小板製剤の廃棄率は 0.3%(3,213U)で、前年 0.3%(3,530U)と横ばいである。

エ 血漿製剤の廃棄率は 1.7%(4,575U)で、前年 1.7%(4,528U)と横ばいである。



(7) 疾病別及び年代別輸血状況

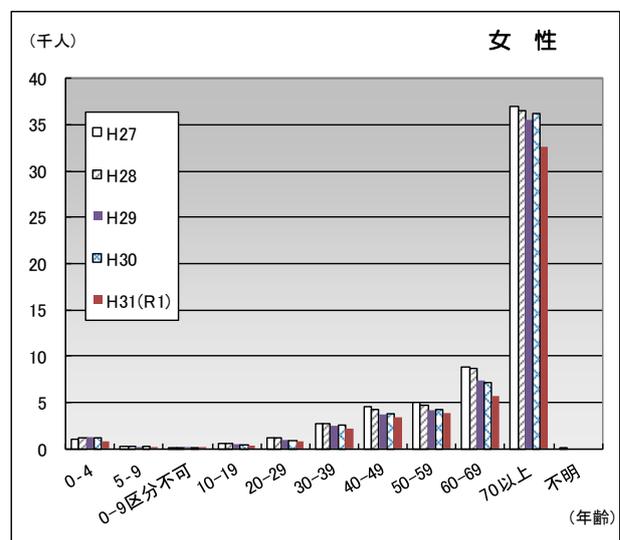
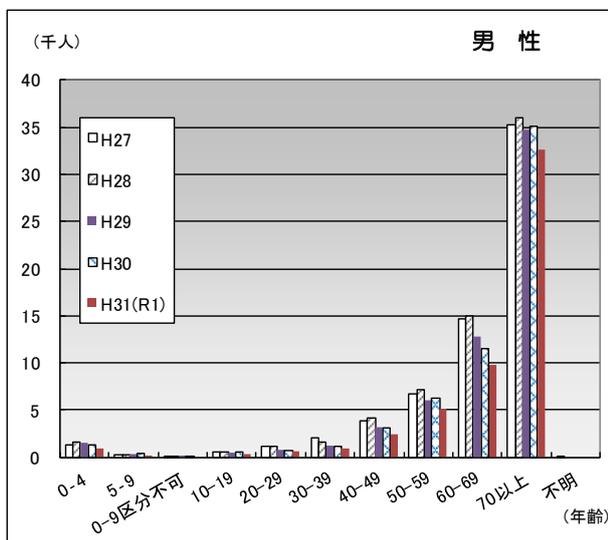
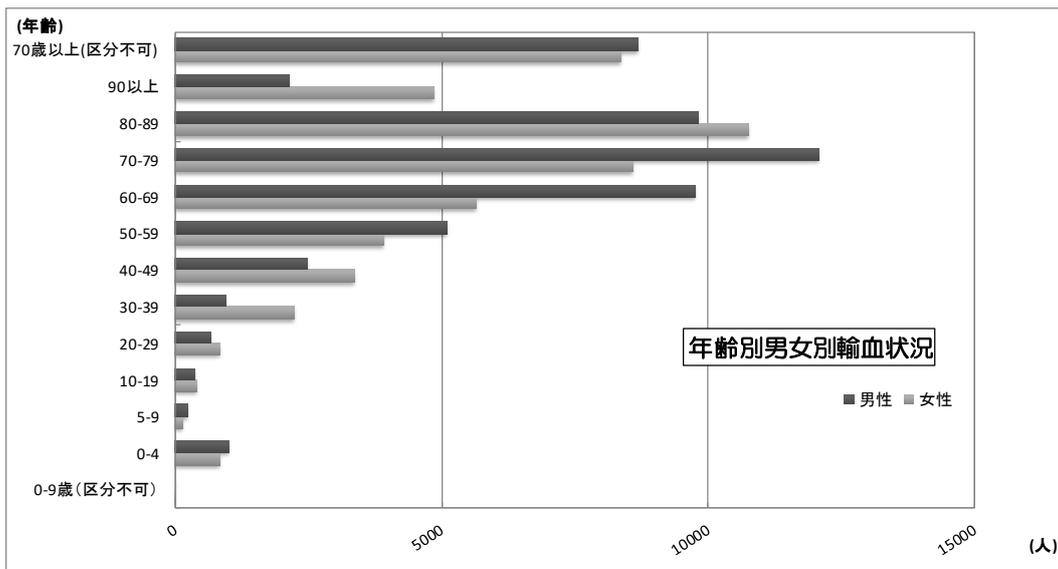
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の36.4%が使用されており、前年(38.8%)とほぼ同様である。

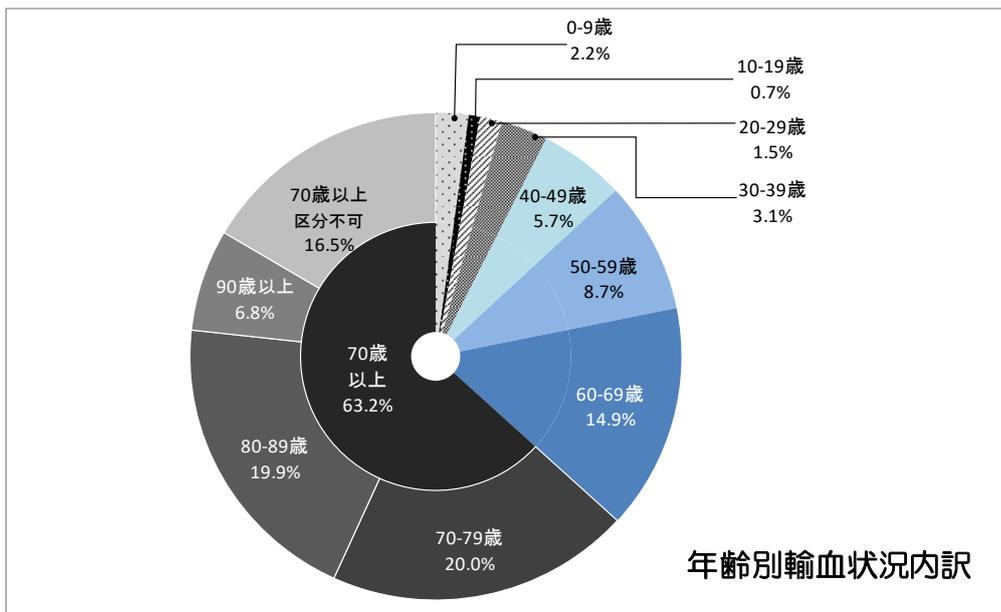


※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

・年代別では、50歳以上の患者への使用が全体人数の86.8%、60歳以上 78.1%、70歳以上 63.2%で、いずれの区分でも前年(50歳以上86.1%、60歳以上77.0%、70歳以上61.0%)より増加している。

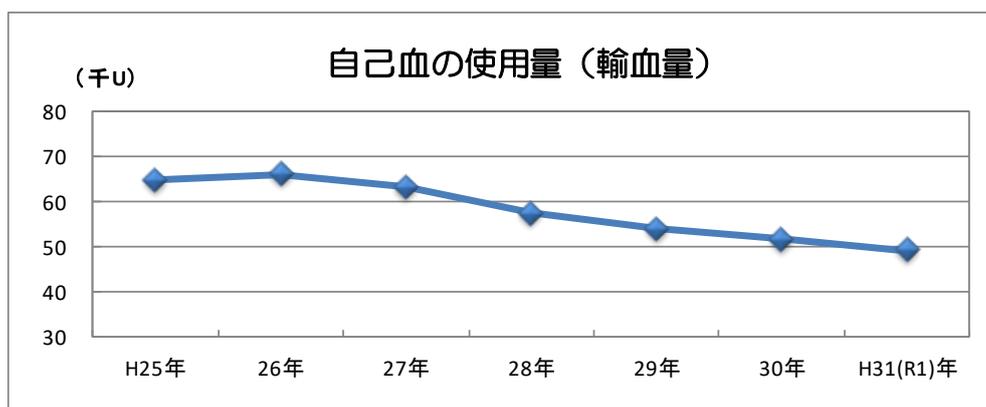
※同一人について:30日間の複数回使用は1人としてカウント。平成29年調査より70歳以上も10歳ごとに集計。区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。





(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は49,155Uで、前年(51,687.9U)より減少している。

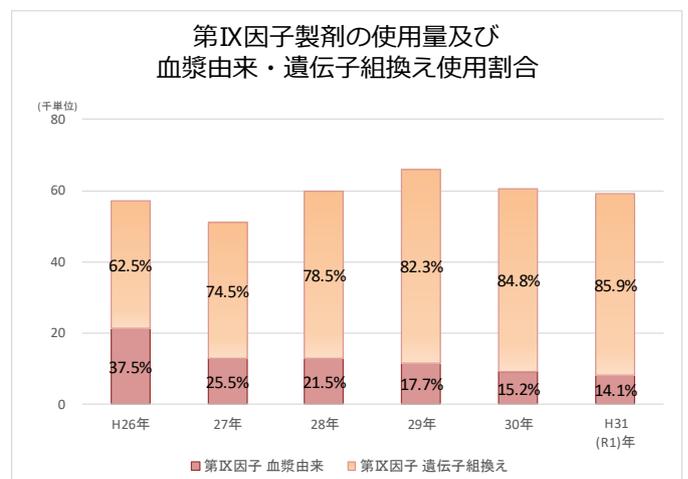
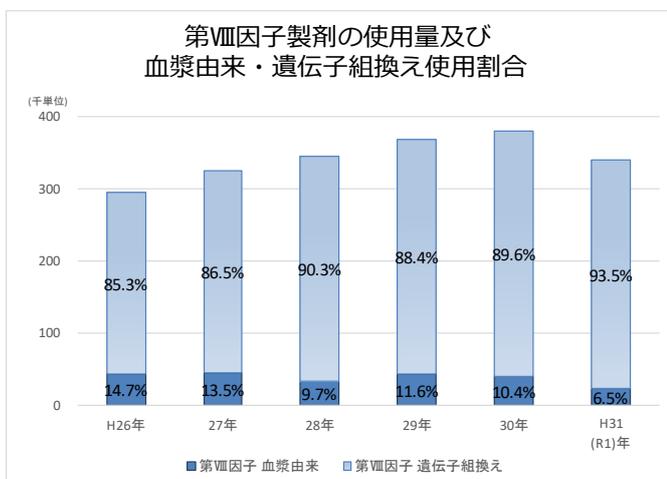
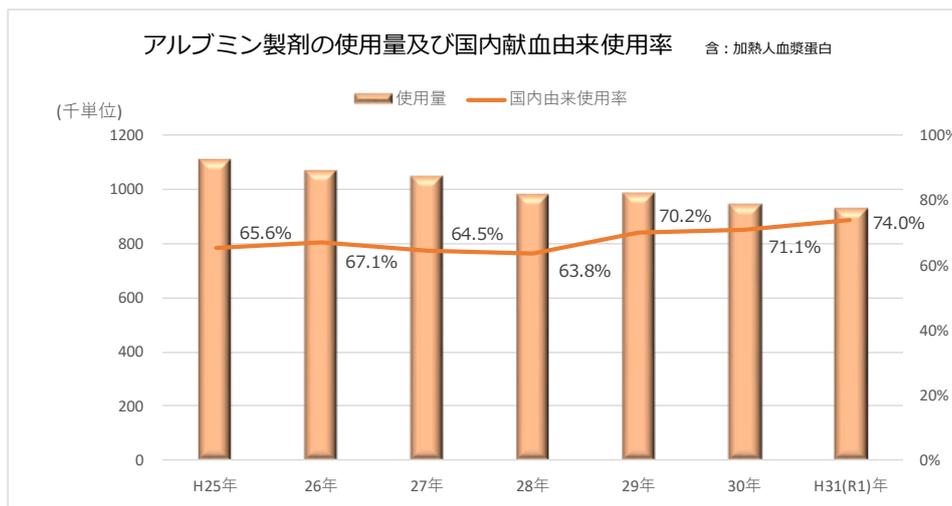
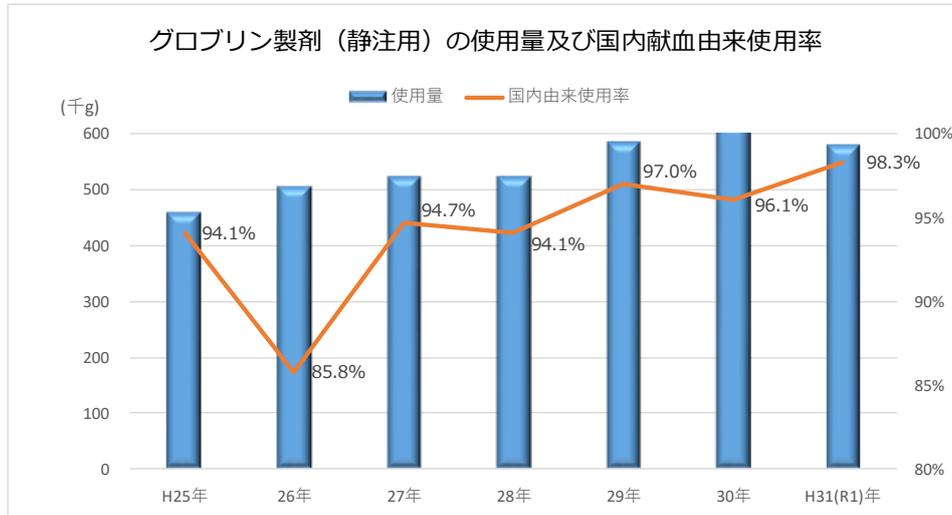


(9) 血漿分画製剤の使用状況

血漿分画製剤（トロンビン及び組織接着剤を含まない）の使用量は 464,999.5 本で、前年（498,803 本）より減少した。

なお、グロブリン製剤（静注用）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は 98.3%（123,653.7 本）で、前年 96.1%（140,968 本）より国内自給率は向上した。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は、74.0%（175,614 本）で、前年 71.1%（171,249 本）より国内自給率は向上した。



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1 単位=250IU